



Title	鎖骨奇形
Author(s)	森田, 和夫; 牟田, 信義
Citation	日本医学放射線学会雑誌. 1976, 36(3), p. 197-199
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/19841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

鎖骨奇形

札幌医科大学放射線医学教室 (主任 牟田信義教授)

森田和夫 牟田信義

(昭和50年9月8日受付)

(昭和50年10月16日最終原稿受付)

An Anomaly of the Clavicle

Kazuo Morita and Nobuyoshi Muta

Department of Radiology, Sapporo Medical College

(Chief: Prof. Nobuyoshi Muta)

*Research Code No.: 505 Bones and Joints**Key Words: Clavicle, Anomaly*

An anomaly of the clavicle is presented. A 61-year-old male was admitted to our clinic because of cancer of the gum. His chest film revealed that the inner third of the right clavicle was thicker than the left one, and an osseous branch extended upward and outward from the upper edge of its sternal end. The direction of the branch had no correlation with the musculus sternocleidomastoideus. At autopsy the osseous branch measured 3 cm in length and 8 mm in width. The musculus sternocleidomastoideus was intact.

鎖骨の奇形は種々⁴⁾報告されているが、私達も稀な奇形を1例経験したので報告する。

症 例

61歳の男子。下顎の歯肉癌の診断で当院の口腔外科にて左半側の下顎骨切除を受けた後、当科で左側頸部の放射線治療を行った。生来、右の斜頸があつた。右鎖骨上窩、右頸部を触診すると、右鎖骨の胸骨端から外上方に向う、約3 cmの長さの硬い枝状の突起を触れた。鎖骨のエックス線写真(第1図)をみると、右鎖骨の内側1/3は左に比べて太く、やや下方に弯曲して其上縁胸骨端の近くから外上方に向う骨突起がみられた。この突起の先端は棍棒状になつていた。他に腰椎に変形性脊椎症があつた。この症例は歯肉癌の浸潤によつて、突然大出血が起り、急死した。剖検により、右鎖骨の枝状の突起が確認された。その

骨枝は骨標本で長さ3 cm、幅8 mmであつた(第2図)。

考 案

鎖骨の奇形は少くないが、又状或は枝状分岐の報告は稀である。それでも鎖骨下縁の場合には Henchen³⁾ が tuberculum conoideum のところに異常な枝状形成があつて、短くなつた processus coracoideus と関節様に結合している1例を報告し、Villányi⁸⁾ は lig. coracoclaviculare の石灰化の例を報告している。更に Reinhardt⁷⁾ は鎖骨外側1/3の部分の舌状の骨突起及び骨の弓状形成の例を報告しているが、これも lig. coracoclaviculare の石灰化によると思われる。鎖骨の内側端の又状分岐については Dorland と Porot¹⁾ の報告がある。しかし鎖骨上縁の枝状分岐についての報告はほとんどない。一側の鎖骨の体部から枝が

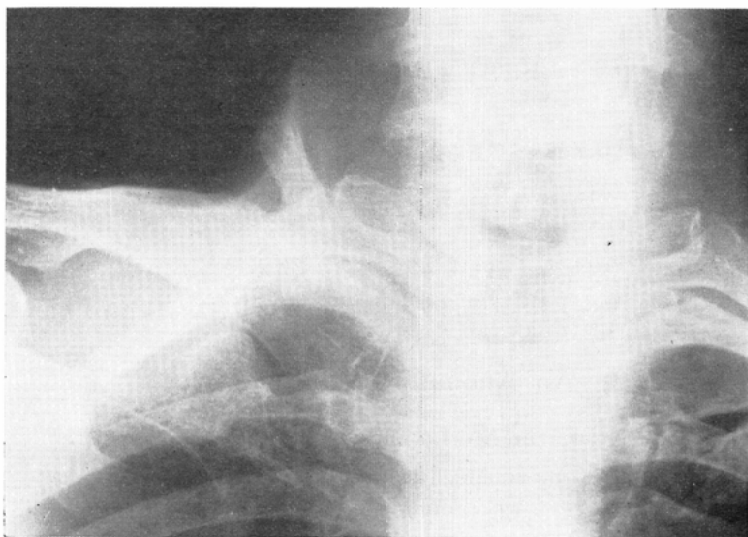


Fig. 1 A 61-year-old male. An osseous branch extended upward and outward from the upper edge of the sternal end of the right clavicle.

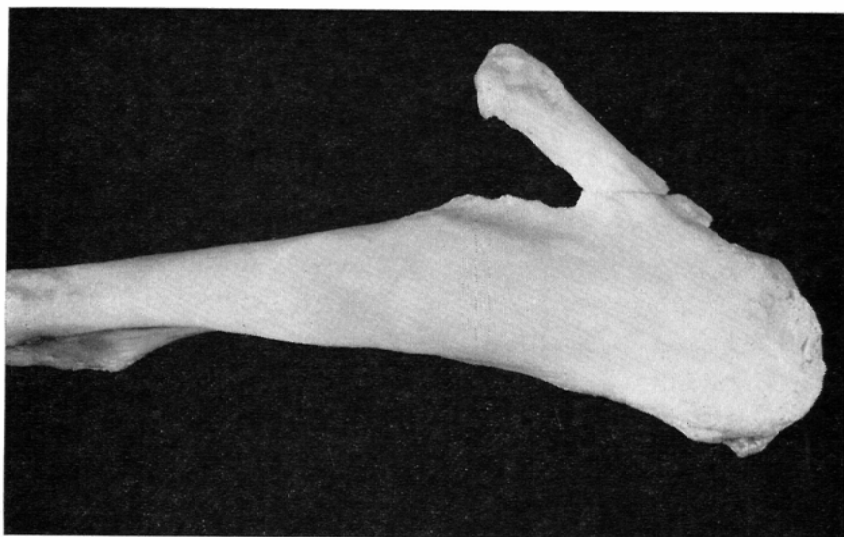


Fig. 2 The right clavicle of case 1. An osseous branch protruded from the upper edge of the sternal end, measuring 3cm in length and 8mm in width. The transverse line at the root of the osseous branch is a cut line made by mistake at the autopsy.

出で第5, 6頸椎に融合している Taruffi の報告を Manzi⁴⁾ が引用している. しかしこれについてはおそらく鎖骨の枝でなく, 頸肋と考えるべきであろうと Naitana⁵⁾ はいつている. 私達の例に近い枝状分岐としては Naitana⁵⁾ の報告がある. Naitana の例は鎖骨の中1/3の点より, 鎖骨本体と同じ位の太さの枝が, 上外後方に向つて伸びている. Skubiszewski⁶⁾ は胸鎖乳突筋の骨性の metaplasia によつて tuberculum sternocleidomastoideum に比較的大きな骨突起を生じ, これが斜頸を引起すことがあるといつている. 又, 胸鎖乳突筋の骨化については Fortschr. Röntgenstr. の Fragekasten²⁾ に報告がみられるが, 私達の場合にはこの筋肉の走行と骨枝の方向とは異つており, 剖検にても筋肉の異状は認められなかつた. 鎖骨の先天性の奇形と考えられる.

ただし cartilaginous exostosis であるという意見もある. 私達の場合, 膝関節附近の検索は逸したが, 頭蓋骨, 胸椎, 肋骨, 肩甲骨, 大腿骨近位端に異常を認めず, 頸椎に骨軟骨症, 腰椎に変形性脊椎症を認むるのみである. 天児民和の骨・関節X線診断図譜⁹⁾ には単発性の軟骨性外骨腫1401例中鎖骨に11例の発生が見られたとある. ただ同書によつても, 軟骨性外骨腫は通常長管骨のメタフィーゼの腱附着部に発生し, 骨皮質に垂直方向に発育するか, その腱の牽引方向に一致して成長するものが多いとある. 発生部位はともかく, 骨枝の生成方向も私達の場合はこれには当はまらない. また同図譜の軟骨性外骨腫には, 私達の例のような正整とした骨枝をみない. 軟骨性外骨腫は乳幼児に発見されることは稀で, 10歳代になつて受診することが最も多い⁹⁾. 私達の例は, いつから骨異常があつたか正確にはわからないが, 患者は生来斜頸があつたと述べている.

ま と め

61歳の男子, 右鎖骨の内側1/3が少し太くなり, その上縁胸骨端の近くから上外方に向う枝状の骨突起を出している1例を報告する.

この骨標本は本学解剖学講座の三橋公平教授に作製していただきましたが, こゝに感謝の意を表します.

(この要旨は昭和46年6月, 第42回日本医学放射線学会北日本地方会において発表した.)

文 献

- 1) Dorland, P., et Porot, J.: Aspect en fourche de l'extrémité interne des clavicules. J. Radiol. Électrol. 38 (1957), 692—693.
- 2) Fragekasten: Fortschr. Röntgenstr. 81 (1954), 686—687.
- 3) Henchen, F.: Angeborenes doppelseitiges Gabelschlüsselbein durch Verschmelzung des Rabenschnabelfortsatzes mit dem Schlüsselbein. Zentralbl. Chir. 43 (1936), 2556.
- 4) Manzi, A.: Considerazioni clinico-radiologiche sulle malformazioni della clavicola. Chir. Org. Mov. 49 (1960), 133—143.
- 5) Naitana, S.: Rara malformazione della clavicola: Clavicola Biforcata. Chir. Org. Mov. 43 (1956), 259—266.
- 6) Skubiszewski, F.: Knöcherne Metaplasie des clavicularen Teiles des M. sternocleidomastoideus, zitiert durch Viehweger in der Handbuch der Medizinischen Radiologie. Bd. IV. Teil 2. p. 446, Springer, Berlin. Heidelberg. New York, 1968.
- 7) Reinhardt, K.: Eine doppelseitige Anomalie am lateralen Klavikuladrittel, bestehend aus einer bogenförmigen Duplikatur des Knochens in Richtung auf das Coracoid und aus akzessorischen Knochelementen. Fortschr. Röntgenstr. 113 (1970), 527—530.
- 8) Villányi, Gy.: Seltener Fall der Verkalkung des Ligamentum coracoclaviculare. Fortschr. Röntgenstr. 112 (1970), 695—696.
- 9) 天児民和: 骨・関節X線診断図譜, II骨腫瘍 (1969), 6—44, 金原.